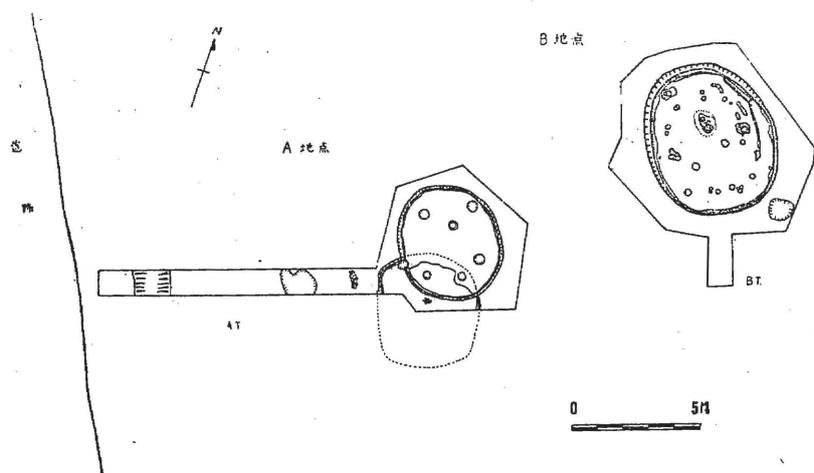
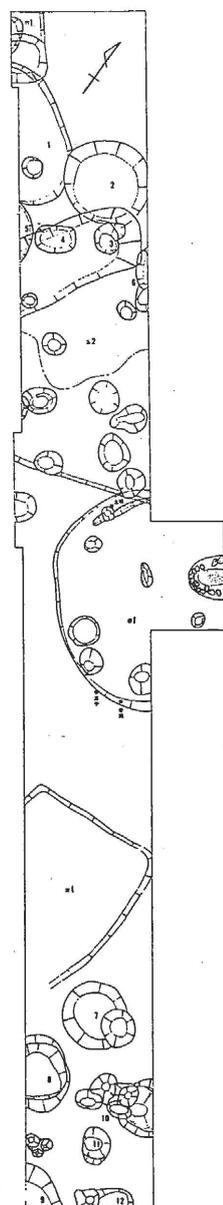


第3図 昭和34年発掘調査位置図 (S = 1/6000)



第4図 昭和34年発掘調査全体図 (S = 1/300)



第5図 昭和54年発掘調査全体図 (S = 1/111)



第6図 昭和34年調査 第3号住居跡遺物出土状況



第7図 昭和34年調査 第2号住居跡遺物出土状況



第8図 昭和54年発掘調査状況 トレンチ



第9図 昭和54年発掘調査状況 トレンチ



第10図 昭和54年発掘調査状況 土器出土状況



第11図 昭和54年発掘調査状況 トレンチ内ピット

2 吹上遺跡の概要

吹上遺跡（No. 11-013）は数度の遺跡範囲の変更増補を繰り返し、現在は第2図³の範囲になっている。吹上遺跡の範囲内には昭和34年調査地点を中心とした吹上貝塚（No. 11-016）が存在している。遺跡の標高は22～18m程で、『吹上遺跡（A地区）』（1990年）の報告に際し、便宜的に道路を境としてA地区、B地区、C地区の3地区に遺跡範囲内を区分した。発掘調査はこれまで学術調査が2回、開発等に伴う緊急調査が4回実施されている⁴。A地区では、集合住宅建設に伴い第1・3次調査が行われ、弥生、古墳、奈良、平安の集落と縄文時代前期の住居内貝塚が検出されているが、縄文時代中期の住居跡は検出されていない。B地区では、いわゆる「吹上パターン」が提唱された縄文時代中期の吹上貝塚がそのまま位置するほか、第2・4次調査では旧石器時代の礫群、縄文時代中期の住居跡、弥生時代中期の土器片が出土している。C地区では、白子川を望む崖線に沿ったA・B地区より一段低い場所で、昭和54年調査地点があり、過去には縄文時代後期・晩期の土器の散布が認められていた。

3 返却資料の概要

返却資料の中には、遺跡名、調査地点・時期などが確認された遺物群もあることから、各グループの概要を示す。

(1) 昭和34年調査の概要

文献 柳田敏司ほか 1959 『大和町のむかし吹上貝塚』郷土誌資料第3集 大和町教育委員会

調査期間 昭和34（1959）年4月15日～6月2日

目的 学術調査

位置 和光市白子三丁目4376-1、4375（旧大和町大字下新倉字吹上）

注記 Y20Ⅲ44、Y20Ⅲ45など

内容 縄文時代中期住居跡3軒検出。第1・

2号住居跡は重複し、新旧関係は第2号住居跡の方が新しい。第1号住居跡から完形・半完形の多量の土器のほか土器片錘13点出土。第3号住居跡は、縄文時代中期住居内貝塚の住居で、土器片錘23点の他、住居跡の覆土2～3層より完形・半完形の多量の土器が出土し、床面及び炉跡出土の土器と時期差が見られることから、第3号住居跡が後の「吹上パターン」のモデルとなる。

今回の作業 昭和34年貝塚調査地点の遺物と認められたため、注記の左上部に遺跡番号「16」を追記した。

(2) 昭和54年調査の概要

文献 『和光市史1』「吹上遺跡」

調査期間 昭和54（1979）年8月20日～9月2日

目的 市史編纂の資料調査（学術調査）

位置 和光市白子三丁目4379-1、4379-2
吹上地区台地東端の一段低い部分

注記 吹上3区黒Ⅲ、吹上4区黒下など

内容 台地縁辺に直交する幅2m、長さ20mのトレンチ調査。トレンチ内を1～10区に区分した。土層は、表土、黒色土、茶褐色土、褐色土、ローム層からなる。遺構は、縄文時代中期住居跡1軒、縄文時代土坑12基、古墳時代中期住居跡2軒、平安時代9世紀代の住居跡1軒。遺物は、黒色土中より安行Ⅲc式土器が主として出土、土層内に骨紛が部分的に混じる。

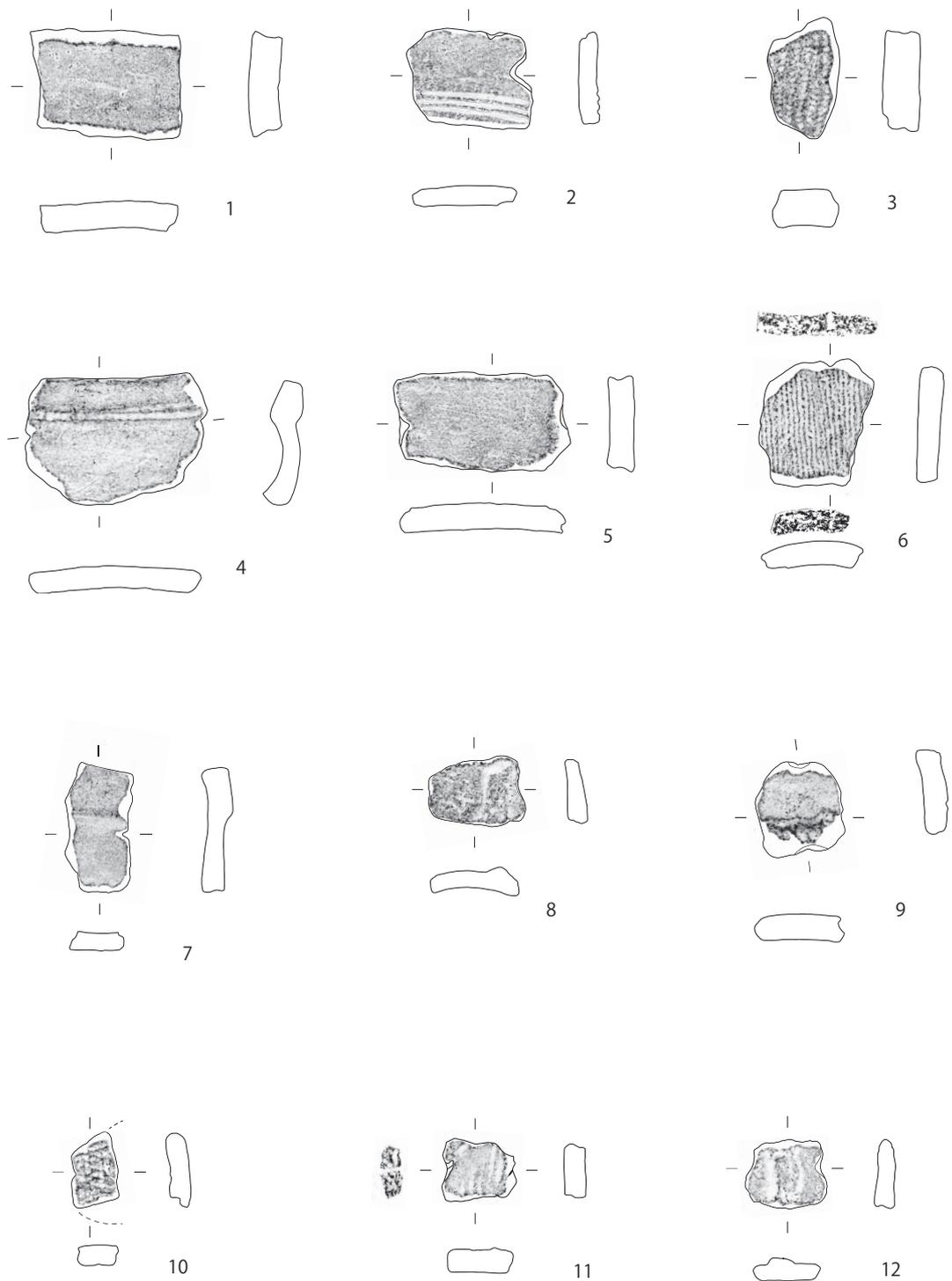
今回の作業 昭和54年調査地点の遺物と認められたため、注記の左上部に遺跡番号「13」を追記した。

(3) 岩井住男氏論文資料

文献 岩井住男 1971 「大和町出土の縄文時代晩期の土器について」『鳳翔』9号 埼玉大学考古学研究会

資料採取位置 和光市白子三丁目13番地（推定地4385-1、4386）⁵

内容 地元農家の方が採取した資料の内、主に縄文晩期安行Ⅲcなどを資料紹介。



第 12 図 土器片 12

今回の作業 岩井氏の論文資料と認められたため、「ヤマト表」と平成26年新たに注記した。

(4) 市場峡遺跡の土器

文献 『和光市史1』「市場峡遺跡」

経緯 昭和36年鬼高式土器の一群（『和光市史1』第133図市場峡遺跡出土土師器実測図）が天地返しにより出土した。（現名称 市場峡・市場上遺跡）

今回の作業 遺跡が確認されたため「17表」と平成26年新たに注記した。

(5) その他の遺物

文献 谷井 彪・高山清司 1968 「大和町の遺跡と出土土器（弥生時代・古墳時代）」『埼玉考古』第6号 埼玉考古学会

内容 注記の無い破片遺物（土師器・須恵器）がコンテナ2箱分存在し、特徴的な高坏（『和光市史1』第31図3）は上記谷井・高山論文中に「妙典寺遺跡」出土土器として掲載されていることが確認された。2箱分の弥生・古墳時代土器群は、市場峡・市場上遺跡あるいは妙典寺遺跡の可能性がある。

今回の作業 遺跡が不確定なため「ワコウ」と平成26年新たに注記した。

4 資料紹介

今回簡単な分類を行った際に新たな土器片錘が確認されたので、併せて資料紹介を行う。当該資料は、昭和34年調査資料（第12図1～10）と、昭和54年調査資料（第12図11・12）から確認されたものである。法量は、第1表土器片錘法量表に示す。

(1) 昭和34年調査資料

第12図1は、深鉢形土器の胴部破片を利用し横方向に2箇所浅い窪みを付け製品としている。文様は横ナデの無紋である。（注記16.Y15B01.2）

第12図2は、深鉢形土器の頸部破片を利用し横方向に2箇所刻みを付け製品としている。文様は頸部無紋帯下部に半裁竹管の沈線が横方向に引かれている。（注記16.Y15B01～2）

第12図3は、半欠損品であるが、深鉢形土器の胴部破片を利用し横方向に浅い窪みを付けている。文様は地文にRL縄文が施されている。（注記16.Y15B04）

第12図4は、鉢形土器の口縁部破片を利用し横方向に2箇所深く刻みを付け製品としている。文様は口縁直下に口縁部と胴部を画するように横方向の沈線が引かれ、横ナデの無紋である。4は、既報告『大和町のむかし吹上貝塚』33頁の第14図B地点出土土錘の

表1 土器片錘法量等

第12図 No.	重量 (g)	刻み幅 (mm)	長軸 (mm)	短軸 (mm)	依存度	注記	備考
1	69	61	65	40	完形	16.Y15B01.2	
2	29	43	52	42	完形	16.Y15 B01～2	
3	31	40	50	29	1/2欠損	16.Y15 B04	
4	73	73	78	57	完形	16.Y16 B04	大和町のむかし『吹上貝塚』第14図4（33頁）と同一
5	58	61	72	42	完形	16.Y18Ⅲ41	
6	41	52	58	42	完形	16.Y18Ⅲ32	
7	27	22	54	28	2/3欠損	16.Y19Ⅲ43	
8	16	35	42	30	完形	16.Y19Ⅲ42 4区	
9	23	35	49	39	完形	16.Y19Ⅲ43	
10	8	16	29	19	1/2欠損	16.Y20Ⅲ94	
11	13	25	30	27	完形	13.1T3区クロ	
12	10	28	35	30	完形	13.3区クロNo1	

4番と同一であり、第3号住居跡出土である。
（注記 16. Y 16 B 04）

第12図5は、深鉢形土器の胴部破片を利用し横方向に2箇所浅い窪みを付け製品としている。文様は横ナデの無紋である。（注記 16. Y 18 III 41）

第12図6は、半欠損品であるが、深鉢形土器の胴部破片を利用し縦方向に2箇所刻みを付け製品としている。文様は地紋に無節Lの燃糸文が施されている。（注記 16. Y 18 III 32）

第12図7は、半欠損品であるが、深鉢形土器の口縁部破片を利用し横方向に深く刻みを付けている。文様は無紋であるが、口縁直下には段差を有している。（注記 16. Y 19 III 43）

第12図8は、深鉢形土器の胴部破片を利用し横方向に2箇所浅い刻みを付け製品としている。文様はヒダ状の微隆帯が垂下している。胎土に金雲母を多量に含み、阿玉台式土器である。（注記 16. Y 19 III 42 4区）

第12図9は、深鉢形土器の胴部破片を利用し縦方向に2箇所浅い刻みを付け製品としている。文様は横方向の波状沈線と押しきが見られる。胎土に金雲母を含み、阿玉台式土器と見られる。（注記 16. Y 19 III 43）

第12図10は、半欠損品であるが、深鉢形土器の胴部破片を利用し横方向に刻みを付けている。文様は地文にLR縄文が施されている。（注記 16. Y 20 III 94）

（2）昭和54年調査資料

第12図11は、深鉢形土器の胴部破片を利用し横方向に2箇所に深い刻みを付けている。文様は地文にRL縄文が施されている。文様、焼成、色調から縄文時代中期加曾利E3式以降と見られる。（注記 13.1 T 3区クロ）

第12図12は、深鉢形土器の胴部破片を利用し横方向に2箇所に浅い窪みを付けている。文様はヒダ状の微隆帯が垂下している。胎土に金雲母を多量に含み、阿玉台式土器である。（注記 13.3 区クロ No1）

今回の第12図の土器片錘は、1～7、10は縄文時代中期の勝坂から加曾利E式の古手と見られ、昭和34年発掘調査の検出住居跡と時期的にも合致している。

5 終わりに

和光市吹上地区の土器が埼玉県立博物館に保管されていた理由は、和光市史の編纂に伴い、県立博物館において資料分類・分析が行われていたことが想像にかたくなく、和光市史に再録されている「岩井論文」の土器資料が同じくコンテナに入っていたことが証明している。

今後も時間が許されれば過去の遺物の再整理を進め、このような形で資料紹介を行い、資料の蓄積を進めたい。

【註】

1. 埼玉県の県立博物館施設再編整備計画に伴う収蔵品整理を行ったところ、未登録の「和光市の土器」コンテナが出てきたため返却された。
2. 遺物を観察したところ、岩井住男氏が「大和町出土の縄文時代晩期の土器について」『鳳翔』9号（1971年）により資料紹介を行った土器であり、『和光市史1』に再録されている土器であった。
3. 吹上遺跡の変更増補経緯、昭和34年4月吹上貝塚発掘調査。昭和47～48年埼玉県内全域の遺跡分布調査により、吹上地区にNo. 11-013（名称なし）遺跡、No. 11-016吹上貝塚の2箇所が「埼玉県埋蔵文化財包蔵地台帳」に記載された。昭和54年8月20日～8月30日（No. 11-016）富貴揚遺跡の名前で発掘を行う。昭和56年『和光市史1』の市内の遺跡一覧では、13番・種別集落跡・名称吹上遺跡、16番・種別貝塚・名称吹上貝塚と掲載された。平成3年8月12日No. 11-013の吹上遺跡の範囲を全体に拡大し、No. 11-016吹上貝塚を含めた。同時に吹上貝塚の昭和34年発掘地点を中心に範囲を西へ移動した。平成15年3月25日No. 11-013の吹上遺跡、No. 11-016吹上貝塚同時に遺跡範囲を一部縮小した。
4. 第1次調査＝平成元年（1989）7月～8月発掘、

白子 3-4418-3、4419-2。第2次調査＝平成7年（1995）6月発掘、白子 3-4384-6、-7。第3次調査＝平成8年（1996）2月～6月発掘、白子 3-4419-1、4420-1、4421-1、4417-3、4422-1、-2。第4次調査＝平成9年（1997）10月発掘、白子 3-4384-8

5. 資料採取した野浦氏の耕作地から推定した。

【引用・参考文献】

- 岩井住男 1971「大和町出土の縄文時代晩期の土器について」『鳳翔』9号 埼玉大学考古学研究会
- 鈴木一郎ほか 1998「吹上遺跡（第2次）の調査」『市内遺跡発掘調査報告書1』和光市埋蔵文化財調査報告書第20集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2001「吹上遺跡（4次）の調査」『市内遺跡発掘調査報告書4』和光市埋蔵文化財調査報告書第24集 和光市教育委員会
- 鈴木一郎ほか 2003『吹上遺跡（第3次）』和光市埋蔵文化財調査報告書第30集 和光市遺跡調査会
- 竹石健二ほか 1990『吹上遺跡A地区』和光市埋蔵文化財調査報告書第4集 和光市遺跡調査会
- 谷井 彪・高山清司 1968「大和町の遺跡と出土土器（弥生時代・古墳時代）」『埼玉考古』第6号 埼玉考古学会
- 谷井彪ほか 1981『和光市史史料編一』和光市
- 柳田敏司、栗原文蔵ほか 1959『大和町のむかし吹上貝塚』郷土誌資料第3集 大和町教育委員会

すずき いちろう（和光市教育委員会）